

モビリティ・マネジメント教育(交通環境学習)の普及に向けた手引書の作成

公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団 岡本英晃
株式会社地域未来研究所 田中雅宣、貞松純子



背景

平成25年度実施アンケートにおいて。。

自治体

これまで取組んだことのない自治体の7割以上が「MM教育に関心がある」と回答

しかし、取組まない理由として。。

人手不足・・・40.7%

取組み方法や進め方がわからない・・・32.1%

どのようなことを教えたらいいかわからない・・・28.4%

学習効果がわからない・・・23.5%

予算が確保できない・・・16.0%

教科学習との関連付け方法や具体的な授業内容などといった詳細な情報の不足

学校

実施校のすべてで、「学習効果はある」、「今後もMM教育は必要」と回答

しかし、課題点として。。

教科学習や単元に結びつかない・・・14.8%

参考となる資料が少ない・・・14.8%

行政や交通事業者との調整が大変・・・11.1%

目的

教員目線で参考となる手引書の作成

※平成25年度実施アンケート結果に関しては、モビリティ・マネジメント教育ポータルサイト (<http://www.mm-education.jp/index.html>) に掲載しています



実施内容

1. 学校教育とMM教育との親和性の整理

教員に参考としてもらえるように、学習指導要領及び、エコモ財団の支援自治体、支援校をはじめとする事例を精査し、実施可能な教科・学年を整理

2. 教員に対するヒアリング

札幌市でMM教育を実践された教員に協力いただき、実施効果や、教員が参考しやすい手引書の作り方などについてヒアリングを実施

表一交通環境学習との関連付けが考えられる授業

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
社会			◎	○	◎	◎
理科			△	○	△	◎
生活	◎	◎				
家庭					○	○
道徳	○	○	○	○	○	○
総合的な学習の時間			◎	◎	◎	◎
特別活動	○	○	○	○	○	○

※この他に、算数の授業で、バス利用者数やCO₂排出量などの指標を用いてグラフの見方や計算の技能向上に資する学習や、道徳の授業で、(公共の場などで)回りの人を思いやることが出来る人間育成に資する学習も考えられる

成果：交通環境学習の手引書

事例として、教員が指導計画書まで作成した札幌市。府下の自治体職員や交通事業者向けの手引きを作成した京都府。交通すごろくやフードマイレージなど短時間での取組み教材が多くあり、教員向けの研修を行っている川西市の3自治体の合計22事例を掲載

実践された学年を明記

事例番号	実践した学年						単元・プログラム名	実践した科目 ※()でも対応可能	実践地域	指導計画の掲載	掲載ページ
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生					
1	○						★でんしゃのトリー	道徳	札幌市	●	11
2	○	○					★ピン・ポン・バスでつながるわたしたち	生活、道徳	川西市		15
3		○	○	○	○	○	★私たちの川西市(バス編)	生活、総合、道徳	川西市		17
4			○				もっと知りたいみんなのまち	社会	札幌市	●	18
5			○				わたしたちの市のようす	社会	札幌市	●	23
6			○				昔の道具とくらし	社会	札幌市	●	28
7			○	○	○	○	★私たちの川西市(鉄道編)	社会、総合	川西市		33
8			○	○	○	○	★買い物から社会を考える	社会、総合	川西市		34
9				○	○		★バス車両の工夫見学	社会、総合	京都府		36
10			○	○	○	○	★交通すごろく	生活、総合、理科	川西市		38
11			○	○	○	○	★私たちの川西市(交通まちづくり編)	社会、総合	川西市		40
12				○			身近なバスと私たちのくらし	総合(3年社会)	札幌市	●	41
13				○			わたしたちのくらしと市電	社会	札幌市	●	46
14				○			わたしたちのくらしと公共交通	総合(3年社会)	札幌市	●	51
15				○	○		★鉄道を支える仕事	社会、総合	京都府		56
16					○		くらしを支える情報	社会	札幌市	●	57
17						○	環境について考えよう	総合	札幌市	●	62

短時間でも実施可能なもの☆で明示

教員のカリキュラム検討の詳細な資料とするため指導計画書を掲載



4年生 実践事例 12

「身近なバスと私たちのくらし」

指導目標	◎市の公共交通機関に関心をもち、意欲的に調べている。 ◎市の公共交通の果たす役割について考え、適切に表現している。 ◎市の公共交通の移り変わりについて必要な情報を集め、読み取っている。 ◎市の公共交通のよさを知り、人々の生活の様子を理解している。
公共交通を教材とする利点	バスの乗車人数がどんどん減り、赤字路線が多くなる中でも、市が補助金を出して、赤字路線を残そうとしていることの意味を考えることで、未来の自分たちにとって望ましい公共交通や地域のあり方を考えることができる。
対象学年	4年生 ※3年生社会でも可
対応教科	総合的な学習の時間、社会
標準校時	6コマ
学習構成	1. 昔の暮らしへの興味を高める ・交通資料館を見学(またはHPを利用)し、市の公共交通はいつ頃から始まり、開通当時の電車や路線はどのようなものだったのかを調べる。 2. 昔の乗り物やくらしを知る ・公共交通の移り変わりを調べて、公共交通が市民の足として古くから利用されていたことを知り、公共交通の発達とともに暮らしが便利になり、環境も大きく変わってきたことを理解する。 3. 市がバス路線を残し続ける理由を考える ・バスがいつ頃から始まり、どのように変わってきたか調べる。 ・年々乗客が減っていることを知る。また、赤字路線が多くなる中でも市が補助金を出して路線を残そうとする意味を考えることを通じて、自分たちの未来にとって、公共交通をどうすればよいかを考える。 4. 公共交通の便利さを実感する ・公共交通の検索ホームページを使い、具体的な施設等への行き方を調べ、公共交通の便利さを実感する。

内容を教員がわかりやすくなるように、学習構成の他、学習指導要領に合わせた指導目標や教材とする利点を明記

今後の展開

- 金沢市、御嵩町、仙台市、富山市など今回掲載できなかった自治体等を含めた掲載事例の充実
- 手引書普及のためのセミナーの実施

手引書は、モビリティ・マネジメント教育ポータルサイト (<http://www.mm-education.jp/tebiki/index.html>) に掲載しています。